

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.29(1), May, 2025

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 代表挨拶
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻 頭 言

“いのち”輝く流汗

小林 日出至郎（新潟大学フェロー）

『オデュッセイアー』第八書（ホメーロス，1981）には、パイエーケス人の若武者二人による、毬を用いた跳躍運動とリズム運動の舞踊が語られている（同掲；第八書，370-380）。彼らは、その舞踊の前に、すでに運動競技としての競走に参加し、さらに、その内の一人ラーオダマースは、拳闘に出場し、勝利している。優勝者である彼は、兄弟のハリオスと共に、他の若武者たちの手拍子を受けつつ、躍動的な身体運動を演舞している。リズムカルで美しく舞う彼らの身体運動は、主催者アルキノオス王や妃、観覧者たちの前で、披露され、そこに招かれた客人オデュッセウスは彼らの踊りを絶賛している（同掲；第八書，381-384）。

ホメーロス作品の誕生から約2800年を過ぎたわが国においても、リズムが前面に顕われる身体運動、リズムダンスが行われている。もちろん、古代ギリシアの若武者によるリズムカルな舞踊と、昨年秋に、私が目にしたN市のある小学校「東青山ふれあい祭り」での現代的リズムダンスは、風土・時代・地域等の独自性を帯びているため、運動動作は全く異なっていると想像される。しかし、両方のリズム運動動作には次のような共通の体験・経験があるように思われる。演舞者がリズムに乗り、躍動的に身体運動を展開し、それらの運動動作に観衆が刺激され、時には美的感情がその場を包むという共通性である。

何故だろう。ドウブラー氏は、舞踊の本質について次のように捉えている。「とくに舞踊にとって不可欠であるのは、舞踊の知覚の基礎が運動感覚であるということによる。われわれが考え、感じ、行うすべてのことの中に、リズムの規則正しい、刺激的な力が働いているので、われわれがリズムを、なんらかの意味で力（force）として考えるのは、避けられないことである。」（ドウブラー，1991，88-89頁）彼女は、人間が考え行動し感情を表現する生命体であり、その生命体の基底に「リズム」があることを指摘する。「リズム」を生かす身体運動は、風土・時代・地域等の独自の運動動作を超え、人間に感情の高揚や喜びをもたらす身体運動として展開される可能性がある。

「東青山ふれあい祭り」は17年目になる学校と地域の連携活動である。子どもたちは、地域・学校での学びを生かし、地域の方々、保護者、教員等と連携しつつ、彼ら独自の御神輿を造り、お祭り用パフォーマンスや地域伝統の舞踊等を習練していた。学校の敷地を生かした模擬店も準備されたが、お祭りの当日は雨天であった。しかし、小学校の体育館は活気と熱気で輝く一日となった。低学年から高学年の子どもたち、地域の方々、保護者、幼児、卒業生等が

集った。身体に響くオープニングの太鼓の演舞，現代のリズムダンスを中心とする舞台でのパフォーマンス，祭りの一体感をもたらす「東青山六階節」等，様々なリズムのイベントが展開された。お祭り用服装での参加者，幼児を連れた保護者，立見の大人の隙間を素早く駆ける楽しそうな園児，あちこちにおける笑顔等，充実した喜びを実感できる日となったのである。

アルキノオス王が主催した舞踊は，他国の客人オデュッセウスをもてなす活動（上掲；第八書，381-384）として，語られている。他国と争わず，共存共栄を意図する王は，勝敗を決する運動競技に習熟する自国の若武者たちが，同時にリズムを生かす舞踊，共存共栄の心を育む身体運動に精通していることを共感したかったのである。

参考文献

ホメーロス：呉茂一訳（1981）オデュッセイアー（上）。岩波文庫。

ドウブラー，M. N.：松本千代栄訳（1991）舞踊学原論。大修館書店。

文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 体育編。東洋館出版社。

大橋奈希左，高橋康史，大西祐司，小島理永（2024）リズムダンス・現代的なリズムの学びに関する考察の試み。京都女子大学教職支援センター研究紀要，第6号。

小林 日出至郎(hinode@ed.niigata-u.ac.jp)

代 表 挨拶

代表あいさつ

深澤 浩洋（筑波大学）

2025年4月から任期が改まりましたが，2025-2026年度の本専門領域の代表を前任期に引き続き務めることとなりました。前任期中に運営委員を務めていただきました先生方に御礼申し上げますとともに，今期，継続また新規で運営委員になられた先生方には，ご協力の程よろしくお願い申し上げます。そして，会員の皆様には，日々の教育研究活動の進展をお祈り申し上げますとともに，本専門領域の活動へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

今年は大阪での万博開催年に当たり，新たな技術などを目にするのと想像しますが，例えば，テクノロジーの発展は，体育やスポーツ，身体文化，健康等々に何をもたらすのでしょうか。テクノロジーがスポーツに活用されることで，それはパフォーマンスの向上に寄与したり，私たちに新たな体験をもたらしたりします。また，体育授業や日々の生活において，自身の運動の仕方を映像で簡単に確認することが可能になったり，運動量などのモニタリングが可能になったりすることで，多くの気づきをもたらされ，体育やスポーツの可能性が広がっていることを実感します。しかし，こうした科学技術が発展する一方で，環境問題などに鑑みますと，成長を旨とする資本主義もどこかで限界に達するのではないかと，という問題にも思い至ります。資本主義やテクノロジーを駆動するのは私たち人間の欲求というか欲望のようなものなのかもしれません。それらがいつしか過剰なものとなり，常に不足や欠乏感を生み出していった結果，もはやテクノロジーも資本主義もわれわれの制御を超えたものになろうとしつつあります。そのような状況の中にあって，自分（たち）の身体（運動や活動）と向き合い，根本的に考えるべき事柄に数多く出会えるように思われます。そして，新たな発想やものの見方が求められているように思えてなりません。

こうした問題意識は，2025年度第75回大会のテーマ「今改めて問う，身体の科学と文化の価値—一次世代を切り拓く未来創造—」に連なっております。目覚ましいテクノロジーの発展とともに，身体の文化にどういった価値を見出すことができるのか，また，その前提としての身体や文化にどのような意味があるのか，などを原理的に問い直してみるきっかけにできれば幸いです。

さて，本領域が専門分科会と称していた当時は，会長・副会長という役職がありました。専門領域に変わったことを期に運営委員会体制を見直すとともに，会長・副会長ではなく，代表・副

代表を置くこととなりました。そこで、学会大会や研究会などの折に、勝手ながら非公式に「会長は会員の皆様お一人お一人です」と申し上げておりました。今回もそのフレーズを繰り返させていただきたいと思います。このフレーズを耳にされた時で結構ですので、本専門領域の意義や可能性などに思いを馳せていただき、日々の研究活動や成果の発表の推進力にいただけると大変うれしく思います。

これからの2年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

深澤浩洋 (fukasawa.koyo.gu@u.tuskuba.ac.jp)

体育哲学考

学生野球の学生応援者は試合を〈観〉ているのか

波多腰 克晃（日本体育大学）

2019年から所属大学野球部の部長を務め今年で7年目となる。就任前には2013年に全日本大学野球選手権大会ベスト4、2017年に明治神宮野球大会で優勝して以来、全国大会出場はおろか、リーグ優勝からも遠ざかっていた。補足すると、1999年から2019年までの春秋リーグ戦優勝大学は、実に東海大学が42戦中32回優勝し、3連覇3回、4連覇1回、5連覇2回、8連覇1回と驚異的な記録を残している。しかしながら、2019年就任後、ありがたいことに本学のチームはリーグ優勝5回、関東大会出場3回（うち準優勝2回）、全日本大学野球選手権大会ベスト16、明治神宮野球大会ベスト4と恵まれた。

これまでなぜ優勝に結びつかなかったのか。当然のことながら、科学的なデータなどを駆使して分析すべきであろうが（おそらく、チーム内ではそうしているはずだが）、就任当初、筆者が感じていた違和感がチーム内にあった。それは、一つのチームとして試合に臨んでいるにもかかわらず、常にネガティブな言動がチームを支配していた印象が残っている。通常、試合前には“チーム一丸”となって声をかけ試合に臨むが、試合が始まり、しばらくして投手が四球で打者を出塁させると、ベンチから聞こえてくる声は「あー・・・」とため息混じりの声ばかりだった。また、打者が打ち損じた時も同様な雰囲気包まれた。その一方で筑波大学や武蔵大学のチームの雰囲気は羨ましいほど活気に満ちており、両チームと対戦するときは、試合前から勝てる気がしなかった。（部長の勝手な印象にすぎません）

しかしながら、次第にチームの雰囲気が変わっていった。それは、控え選手の試合中の関わり方や応援席にいる学生の応援の振舞いにあるかもしれない。ところで、本学野球部には250から300名の部員が所属している。そのうち試合出場登録可能な選手数は25名、その他試合前、試合中の補助要員が数十名いるが、大半の部員は応援席で応援している。この控え選手、応援する部員の試合中の関わり方に変化が現れたように思う。2023年に明治神宮野球大会に出場し、東京六大学野球連盟優勝校の慶應義塾大学との一戦で、本学の応援の声の大きさが響き渡り、それがネット上で一時話題になった。いわゆるバズったといえるのかもしれない。

本学野球チームの従来までの応援との違いは何か。もちろん同じように試合をみて応援していることに変わりはない。ベンチ内にいる控え選手もこれまでと同様に試合に集中してきている。ただ、これまでとは試合に対する“入り込み方”がかわっていった。それはまるで、控え選手が「自分が打席にたっているように」、「自分がポジションについて守っているかのように」試合を“みる”ようになった。このような控え選手や応援側にいる選手のかかわりは一般的に“一体感があるチーム”と表現されるかもしれない。杉本はこの一体感を「本来あるべきファンとプレイヤーの自他分節が身体レベルで融解してしまうこと」と定義する。（杉本厚夫（2017）スポーツを「観る」として「見る」ことの相克—駅伝・マラソンを事例として—、スポーツ社会学研究25巻1号、p.43）

近年の野球観戦は数理的な分析（セイバーメトリック）とそれに基づいて映像処理が行われ、打球の速度、回転数や打球速度、角度、飛距離などが映像として示され、統計学的に野球を“観る”

ことができる。たしかに、試合を冷静に分析しながら観戦することを否定はしない。ただ、チームとして試合に直接出場できなくても「出場している選手のように」試合に没入するほうが、チームにとっては励みになったり、“応援の力”を感じることができると思う。少なくとも、学生野球における応援は、試合を客観的に〈鑑賞〉するようなものではなく、応援者も含めて「試合」の衝動の中に没入する体験に人間らしさの契機が見え隠れしているように思われる。

波多腰 克晃 (hatakoshi@nittai.ac.jp)

書籍紹介

森口佑介 (2024) 『つくられる子どもの性差』 光文社新書

大橋 奈希左 (京都女子大学)

この本の著者とは、上越教育大学時代に、短い間だったが同僚だったことがあり、その頃『おさなごころを科学する』というタイトルも内容も魅力的な本を書いていたことが、印象に残っている。昨年、京都駅近くの本屋で、偶然名前を見つけて、「なつかしいな」と思い手に取って、購入することにした。

我々が専門とする身体教育の「身体」には明らかに性差があるといえるかもしれない。だが、保健体育の教科においても、私の中学校・高校時代には、女子だけが学習する領域だった「ダンス」が、現在は中学校で全員必修となっていて、授業以外でもダンスに夢中になっている男子グループは少なくない。どのような教育を受けるのかによって、子ども達の「当たり前」は変わっていく。

この本の著者森口は、「女の子はおとなしくていいよね。男の子は本当に大変だから」といった日常よく聞かれる言葉について、大人が無意識に子どもの性格や好みの要因を性別に求めているとし、それは正しい態度なのかと問いかける。そして、心理学、脳神経科学の膨大な先行研究のデータを参照して、子ども達の「脳と心」「好み」「空間認知」「言葉」「攻撃性」「学力」「感情」などの性差について、検討を重ねている。また、小さな「性差」がある事柄をふまえた上で、その他はほとんどが根拠のない思い込みであることを暴いてゆく。赤ちゃんのころの多くの行動や能力にはほとんど性差がないのに、年齢とともに性差が見られるようになり、大きくなっていくとしたら、それは生まれつきではなく、子どもの発達の産物であるといえるのだろう。子ども達の発達には、生物学的要因と社会環境的要因の両方が関与する。性差にもまた、生物学的要因として性ホルモンが、社会環境的要因としては親のかかわりや言葉がけ、教師やメディアの影響が示されているという。大人が持つジェンダーステレオタイプが重要な影響を及ぼしているのである。著者は「実際には存在しない女兒と男児の違いを、養育者や教育関係者の思い込みでつくり出しているに過ぎない可能性があります。」と述べている。教育関係者・保育関係者による「多くの子どもを見てきた経験から…」という声は、結局のところ、その方の思い込みに一致した少数の事例を自信満々に話しているだけで、統計的なデータが示されることはまずないそうだ。つまり、その当事者の思い込みに一致していない事例は見過ごされていくことになる。著者は最終章で、大人が変えるべき行動として、小さな性差を生み出している子ども達へのかかわり方と小さな性差を増幅するジェンダーステレオタイプの二段階があるとする。そして、まず必要なのは、私たち大人が、無意識的に行っている行動を振り返ることであると指摘している。

令和7年2月25日筑波大学大学院時代の恩師、片岡暁夫先生が亡くなられた。女子大学に着任して以降、毎日のように「ジェンダー平等」とか「ジェンダーバイアスを失くす」といった言葉を耳にしているが、片岡先生ほど、男女の分け隔てなく学生を育てている方に出会ったことはない。振り返ってみると、私が上越教育大学に就職できたとき、「嫌なことがあっても、絶対に仕事を辞めてはいけないよ。」というお言葉を頂いた。続けて「一週間我慢するんだよ。一週間できたら、一か月我慢するんだよ。一か月あったら、窪田君(旧姓)なら飲み会に誘われるだろうか

ら、飲んだら嫌なことは全部忘れて次の日からまた頑張るんだよ」とおっしゃった。あの時代、私なら「女性が一度仕事をやめたら、二度と戻れないよ」と言ってしまうようなところを、いつも温かく、優しい言葉をかけて、見守ってくださっていた。何よりもありがたく、幸せだった。先に生まれた人がどんな意識を持って、どんな言葉をかけるかで、若い人達の「当たり前」は変わっていく。本当にありがとうございました。ご冥福を心よりお祈りしております。

大橋 奈希左 (oohashi@kyoto-wu.ac.jp)

私の研究

「考えることのよろこび」との出会い

水島 徳彦（小田原短期大学）

今回、この原稿を書き進めるにあたり、ふと「前回、私の研究について書いたのはいつだっただろう」ということが頭に浮かんだ。体育哲学専門領域のHPから調べてみると、どうやら2022年の春のことであったようだ。すると、あれからちょうど3年が経過したことになる。

当時を振り返ると、博士課程後期の学生であった私は、日々、博士論文（以下、「博論」と略記）の執筆に明け暮れつつ、テニススクールのコーチ業に邁進していた。ちょうどその頃、博論のテーマにしていたのが「スポーツ倫理」であった。というのも、そこに関心が向いた理由は、まさに実践の中にあるふとした疑念にある。というのも、テニススクールで子どもに「フェア」の精神や人間性の大切さとともに、テニスの指導にあたっていた私が、そもそも競技者であった頃、競技にのめり込めばのめり込むほど、そのフェアや人間性というところから、遠ざかっていた事実を思い返したためである。つまり、私の博論のテーマは、私を取り巻く様々な実践の渦中にあった私自身の欺瞞に向けられた問いであったともいえる。

さて、あの時から3年も経つと、私の生活にも変化が生じた。幸運なことに現職を得て、方々学生であったあの私が教員として、短期大学で日々を過ごしているのだ。19歳で上京した頃の私からは、まったく想像もつかない未来である（ついに、学割生活ともおさらばである…）。現在、私は保育学科に所属しているが、日々、学生と授業や日常生活の他愛のない会話、そして、学生の悩みなどを聴き、対話をしているなかで、ふと、これまでぼんやりと捉えてきた「教育」とは何なのだろうかという疑問が、私にとって重大な問題として迫ってくるようになった。

もちろん、保育士を目指している学生との会話であるため、その目線は幼児教育という領域に重点が置かれることがほとんどである。しかし、その中には私が経験してきた学校教育やそれを取り巻く諸々の教育環境、そしてテニスコーチとして子どもの指導にあたる際に大切にしていた人間教育の話に通底する内容がおぼろげに浮かび上がってくるのだ。

こうした日々の実践において、「教育とは…」という問いが私の好奇心を駆り立ててくれる。そこで、今は“保育業界”が最も身近な存在となった私は、ひとまず幼児教育という分野（現在はフレーベルの教育思想に着手している）から教育を眺めてみることから始めることにした。その視点を通じて、広く幼児教育に留まらない教育的視点から、いずれ体育に接近してみたいと考えている。

しかし、これまではスポーツの倫理に没頭してきたこともあり、教育関連の問題意識や知見には乏しいこともまた事実である。しかしながら、この実践の中から生じた問いに向き合うことが、何より楽しい。かの田中美知太郎は、このことを「考えることのよろこび」（田中美知太郎、1972）と表現している。彼曰く、それは実用を離れて自由に考えることであり、実務に対する限りにおいて一種の遊びであるという。そして、その遊びのよろこびこそが考えることのよろこびであり、それは苦楽のような相対的なものとは異なる絶対的なよろこびな

のである。

新たな環境での生活を通じて、この「考えるよろこび」に出会えた幸運に感謝しつつ、この難関な問いをよろこんで引き受けつつ、今後の研究生活に勤しんでいきたい。とりわけ、教育分野に関してはようやく定額を迎えた（？）頃合いの赤子のような私だが、今後も変わらずご指導をいただけたら幸いである。

水島徳彦 (n.mizushima@odawara.ac.jp)

箱根合宿研究会情報

2025 年度夏期合宿研究会（第 1 報）

高尾尚平（日本福祉大学）

こんにちは。日本福祉大学の高尾尚平です。今年度より、夏期合宿研究会の世話人を拝命いたしました。昨年度と同様、今年度の夏期合宿研究会も名古屋で開催させていただきます。愛知県での合宿研究会の開催は、本領域にとって原点回帰ともいえます。記録によりますと、第 1 回の夏期合宿研究会は、1962 年（昭和 37 年）の 8 月 11 日～13 日に愛知県南知多町の影向寺で行われたようです。もちろん、この度の合宿研究会は畳に雑魚寝というわけではありませんのでご安心ください。名古屋駅からのアクセスがよく、温泉や研究談義を楽しむことのできる名古屋クラウンホテルで開催いたします。ご参加は、添付の Google form よりお申し込みください。また、特別企画の企画案もお待ちしております（特別企画をご提案いただける方はメールにてご連絡ください）。

日程：2024 年 9 月 13 日（土）、14 日（日）

場所：都心の天然温泉 名古屋クラウンホテル

部屋：シングルユース

（住所）〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目 8 番 33 号 （電話）052-203-1641

地下鉄伏見駅から徒歩 5 分、名古屋駅より徒歩 20 分

☆日程表（申込みの状況によって、多少変更になることがあります）

7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

13 日（土） 受付 研究会① 研究会② 夕食/情報交換会

14 日（日） 朝食 研究会③ 昼食（各自） 研究会④ 事務協議 解散

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見は、末尾のアドレスまでメールにてご連絡ください。

☆費用：宿泊費；11,500 円（1 泊朝食付）

研究会参加費；一般 5,000 円、学生・大学院生・研究生 3,000 円

情報交換会費；8,500 円

☆申込〆切：8 月 26 日（火） ※下記の URL よりお申し込みください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfstAkbILz8dEHtDY0ZfcT10KGGTNhRo4EsvEdYTT5X0iC7cg/viewform?usp=sharing>

※参加予定に変更が生じた場合は、すみやかに担当者までご連絡ください。

※9 月 5 日（金）以降のキャンセルにつきましては不泊料金が必要となります。

※不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡ください。

☆プログラムの詳細は、9 月上旬に配信する予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員：高尾尚平

〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田

日本福祉大学スポーツ科学部

定例研究会

2025 年度 第 1 回定例研究会 (案内)

坂本拓弥 (筑波大学) ・ 野上玲子 (江戸川大学)

日 時 : 2025 年 6 月 14 日 (土) 13 : 00-16 : 45

開催形態 : 【対面】と【オンライン(zoom)】によるハイブリッド形式

【対面】

会場 : 日本体育大学 東京・世田谷キャンパス ※部屋は確定次第お知らせいたします。

東京都世田谷区深沢 7-1-1

注意事項 :

対面会場では、当日、Wi-Fi のゲストアカウントを発行します。

eduroam の利用の可否につきましては、現在のところ未定です。

【オンライン】

接続方式 : zoom

注意事項 :

オンラインからの参加方法については、本専門領域のメーリングリストにてお知らせします。未登録の方は、メーリングリストへの登録をお願いします。また、会員以外が閲覧を希望する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。

オンラインでの参加者は、当日実施する出席調査(Google Forms)に記入をお願いします。

【プログラム】

13 : 00 代表挨拶 深澤浩洋 (筑波大学)

13 : 05 研究発表① 伊藤鴻児 (筑波大学大学院)

運動会における組体操に関する議論の批判的検討

[概要]

本発表の目的は、運動会における組体操に関する従来の議論を批判的に検討し、その課題を明示することである。この試みの背景には、運動会の花形の演目として長く実践されてきた組体操が、その意味を十分に検討されることなく中止されている現状がある。このような現状に対して、本発表は先行議論の論点を改めて検討し、特に児童生徒にとって組体操が有してきた意味を捉え直す必要性とともに、そのために求められる視点を示したい。

13 : 40 研究発表② 王媛 (東海大学大学院) ・ 阿部悟郎 (東海大学)

2001 年・2011 年・2022 年中国体育と健康課程標準の比較について

[概要]

本研究は、中国の「体育与健康」課程標準における三つの改訂版 (2001 年, 2011 年, 2022 年) を対象に、その変遷と特徴を比較分析するものである。まず、それぞれの課程標準における教育理念、育成を目指す人間像、学習目標、評価方法などを比較し、どのような方針の変化があったのかを明らかにする。さらに、各改訂の背景にある社会的・政治的要因や教育改革の流れも踏まえ、課程標準の変化が中国の学校体育における価値観の転換や政策の方向性にどのような影響を及ぼしているのかを考察する。これにより、中国の体育教育の現在地を確認し、今後の課題や改善の可能性について検討を行う。

(休憩)

14:30 研究発表③ 清水智道 (日本体育大学大学院)

競技者における不安を介した自己生成過程

[概要]

本発表は、競技者の不安がどのようにして自己変革していくのか、内面的構造過程を明らかにするものである。本発表は、この問題の考察に当たり、キェルケゴールの「受け取り直し」概念に手がかりを求める。上記の概念により、自力では克服することが困難な不安による苦悩を重ねることを通して、以前は否定的なものとした要因を、自ら異なる「意味」を持つものとして再び受け取ることで内面的な問題との向き合い方を論究する。

15:05 研究発表④ 浅田風太 (東海大学大学院)・阿部悟郎 (東海大学)

体育の教育的可能性の一端に関する検討

: ローティの「リベラル・ユートピア」概念をめぐって

[概要]

本研究の目的は体育の教育的可能性の一端について明らかにすることである。そこで、プラグマティズムにおいてデューイ以後のネオ・プラグマティストに位置付けられるリチャード・ローティの教育理論に基づき検討していく。特にここでは、「リベラル・ユートピア」概念に着目し、模索していく。

(休憩)

15:50 企画発表 跡見順子 (帝京大学先端総合研究機構)

変革の時代における体育哲学としての身心一体科学の挑戦:

体育から発信する日本のビジョンとリアル

[概要]

身心一体科学とは、人とはどのような存在か、どう生きればよいのか、その答えを地球上に創発した生命の適応応答の単位である多細胞生物の細胞の生存原理 (1 メカニカルストレス応答, 2 活動依存性) に求めて、立位を常態として生きる人への実践的対処法(身心調律運動)として解を提供することである。その理論と実践(教育)についてまとめた初の学術書を出版した(「身心一体科学 考え方と方法 —細胞・体軸・エネルギー代謝を意識でつなぐ αB-クリスタリン適応理論」, 東京大学出版会 2024.3.11)。研究会では身心一体科学と体育哲学における「本質論」や「文化論的・構造論的」等 (「体育哲学 e 事典」参照) との関係性についても議論したい。

16:30 副代表挨拶 関根正美 (日本体育大学)

【問い合わせ先: 研究担当】

坂本拓弥 (sakamoto.takuya.ga@u.tsukuba.ac.jp)

野上玲子 (rnogami@edogawa-u.ac.jp)

事務局より

竹村 瑞穂 (東洋大学)

○ 「日本体育・スポーツ・健康学会 第75回大会」について

本年度の日本体育・スポーツ・健康学会大会についての情報は、大会 web (<https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/jspehss75>) にて閲覧することができます。専門領域別の研究発表は大会3日目8月29日(金)に予定されています。

参加申込みおよび研究発表申込みは4月1日より開始されております。研究発表申込みおよび早期割引での参加申込みの締め切りは5月28日(水)13:00までに設定されています。

本専門領域に関連するプログラムも、学会大会HPに公開されます。現時点で準備しております企画は次の通りです。

・大会1日目 8月27日(水) 会場：日本体育大学

- 浅田学術奨励賞・記念講演

テーマ Desire and Violence in modern sport (日本語での発表)

演 者 坂本 拓弥 (筑波大学)

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

今年度より一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会に登録されたメールアドレスを専門領域メーリングリストに登録させていただいております。諸連絡や会報のご案内は、メーリングリストまたは体育哲学専門領域 Web ページを通じてのみ行い、郵送はいたしませんのでご了承ください。メーリングリストへの登録を解除される方は事務局までご連絡下さい。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当：佐々木 (sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第29巻第1号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

深澤浩洋 (代表)

編集者 佐々木 究, 阿部 悟郎, 石垣 健二 (広報担当)

発行日 令和7年5月15日

連絡先 〒115-8650

東京都北区赤羽一丁目7-11

東洋大学赤羽台キャンパス

HELSP0 HUB-3 竹村 瑞穂 気付

bureau@pdpe.jp

【編集後記】

会報第29巻第1号をお届けします。運営委員会新体制となり初めての会報です。まずは執筆者各位に感謝。任期中、どうぞよろしくお願いいたします。さて、新教皇が誕生し、最初の演説で「世界のすべての人々の平和」について語ったようです。これはキリスト教カトリックの世界観に留まらず、現在を生きるすべての人々の「のぞみ」であるように思われます。しかし、現在進行している国家間の紛争や貧困、差別や労働搾取などに思いを巡らしますと、「すべての人々の平和」がそもそもの問いとして立ち現れてまいりますが、とても個人の思考では太刀打ちできないという無力感にかられてしまいます。一個人ではどうも無理。だからこそ問いを発し、他者と多角的視点から議論する必要があるのではないのでしょうか。体育哲学専門領域における多様な問いとそれを巡る一連の議論は、そのような営みの一つであるように思われます。本領域の会報が、そのような営みのささやかなきつかけにでもなれば、望外の喜びです。(G.A.)